

# ブリコラージュ概念の実践的意義の検討

## ——被災地で立ち上げられた地域食堂を事例として——

大阪大学 王文潔

### 1 目的

本報告の目的は、災害を機に立ち上げられた地域食堂の展開を追い、そのプロセスをブリコラージュという概念で分析したうえでその実践的な意義を論じることである。ブリコラージュはレヴィ＝ストロースによって提唱された概念であり、「ありあわせのものでやりくりすること」として災害時においても注目されている。災害を機に被災者支援の新規参入者である個人・団体のなかには、自発的かつ継続的にニーズを掘り起こし、物的・人的リソースを確保して対応するという自己組織的な動きがうまれている。新規参入者のしばしば「行き当たりばったり」に見える支援活動の実践は、まさに、ブリコラージュ、ありあわせのものに基づいたやりくりの試行錯誤の連続と省察の積み重ねの結果（プロセス）である。このような動きを災害時におけるブリコラージュの視点から捉えることは、新規参入者の有効な支援がどのように創出されているかを把握することに寄与するであろう。

### 2 方法

具体的事例として、熊本地震被災地の保育サービス事業者が運営している地域食堂と、西日本豪雨被災地の飲食店経営者が運営している地域食堂を取り上げる。両者はいずれも災害後立ち上げられ、みなし仮設入居者、在宅被災者を対象とする食堂である。調査としては、前者は2018年10月から計5回、後者は2019年5月から計2回、それぞれの食堂での参与観察を行い、発起人および共同運営者に対する聞き取り調査を実施した。

### 3 結果

先行研究の知見によると、ブリコラージュ（ブリコラージュを行う者）は「利用可能なリソースによって構成されたレパートリー」をもとに、当面の課題解決に対してリソースの顕在的・潜在的有用性を認識したうえで、さらにリソースを追加、編集、創造するという「レパートリーを拡張する」作業を行うことが予想される。このような視点をういた結果、調査対象の地域食堂の運営者は、平常時の仕事の専門性と災害支援とのつながりを発見しただけでなく、災害発生前から個人個人の社会ネットワークの各要素を災害支援という文脈で再認識し、組み合わせることが確認できた。運営者は社会福祉協議会や市役所などの準—公的機関、災害支援を専門とする地域外のNPO職員などから専門知を取り入れることで被災者ケアにも取り組んでいる。それぞれの食堂に集まる参加者のニーズに合わせて運営者が対象者と目標を再設定し、支援活動の収束時期を見定めている。

### 4 結論

災害の様相は地域特性の違いによって異なるため、災害支援を通常業務とするNPOの専門家としての絶対的優位性が喪失してしまう。またみなし仮設入居者や在宅被災者など潜在的ニーズを公的支援が包摂しきれない。さらに支援ノウハウやコストが顕在化していないため、地元の福祉NPOは、大きなリスクを伴う潜在的ニーズへの支援に踏み切れない。このような状況下において、潜在的ニーズに対する支援意欲があるものの手探り状態の地元の担い手にとって新たな実践知を確立する必要がある。本報告では、調査対象者が「行き当たりばったりで支援活動をやってきた」という認識から、「微力だけど無力じゃない」という認識にたどりつくまでの、ブリコラージュのプロセスにある暗黙の実践知を形式化する。

### 文献

クロード・レヴィ＝ストロース著、大橋保夫訳、1976、『野生の思考』みすず書房